



資料3

府食第605号
令和2年9月8日

食品安全委員会委員長 佐藤 洋 殿

研究・調査企画会議

事前・中間評価部会 座長 山本 茂貴

令和2年度食品健康影響評価技術研究の3次公募における採択課題
(案)について

このことについて、令和2年8月17日に開催した令和2年度研究・調査企画
会議事前・中間評価部会（第4回）における審議の結果、別添のとおり取りまと
めましたので、報告いたします。

(別添)

令和2年度

食品健康影響評価技術研究の3次公募における
採択課題（案）について

令和2年8月

食品安全委員会 研究・調査企画会議
事前・中間評価部会

令和2年度食品健康影響評価技術研究の3次公募における採択課題

受付番号 主任研究者名 (所属機関名)	研究課題名 (研究期間)	研究概要	評点 (20点満点)	評価所見
2 福家 辰樹 (国立成育医療研究センター)	ベイズ統計学に基づく推定手法を活用したアレルギー症状誘発確率の推計に関する研究(令和2~3年度)	<p>本研究は、アレルギーを含む食品に関する食品の表示等について科学的検証を実施するに当たり、我が国における食物アレルギーを有する者のアレルギー症状誘発確率の推計の検討に必要な科学的知見を得ることを目的とする。</p> <p>具体的には、これまでに国立成育医療研究センターで実施された鶏卵・牛乳・小麦を対象アレルギーとする食物経口負荷試験データを収集・整理するとともに、ベイズ統計学に基づくモデリング手法を含む最新のツールについて比較・検討する。その上で、最適なツールを用いて、アレルギーを摂取することによるアレルギー症状誘発確率を推計し、食品に含まれるアレルギーの定量的リスク評価の基礎資料を提供することを目標とする。</p>	17.0	<p>(総合コメント) 公募内容に沿った研究計画となっており、アレルギーを含む食品のリスク評価に資する。</p> <p>(その他) ・一施設で集めたデータの解析でありバイアスが懸念される。しかし、多数の症例を含むデータであり、その特性の解析を行い、バイアスや不確実性を明らかにすることにより、結果の利用に期待ができる。 ・データ解析の際のモデル設定や推定手法等を専門とする研究者が参画しており、成果を得るために適切な研究体制となっている。柔軟な方法論の適用により、リスク評価に資する成果を期待したい。</p>
3 海老澤 元宏 (相模原病院)	ベンチマークドーズ法によるアレルギー症状誘発確率の検討(令和2~3年度)	<p>食品表示基準におけるアレルギー表示は、食物アレルギー患者の健康被害の発生防止に重要な役割を果たしている反面、表示基準の妥当性は検証されていない。症状誘発閾値は患者の重症度を反映するため、表示基準の検証には大規模な多施設データの使用が望ましい。</p> <p>本研究は、アレルギー拠点病院等の食物経口負荷試験のデータを元に、ベンチマークドーズ(BMD)法により、摂取量による症状誘発確率の推計を行い、現在の食品表示基準におけるアレルギーを含む食品の表示に関する科学的検証の材料となるデータの取得を目的とする。</p> <p>それにより、現在の表記方法がリスク評価に適切であるかを確認することが可能となる。</p>	15.1	<p>(総合コメント) 公募内容に沿った研究計画となっており、多施設による大規模データを活用した解析に期待する。</p> <p>(その他) ・多施設での症例データの収集が計画されていることから、データの精度管理等について十分に検討した上で、研究を遂行してほしい。 ・収集したデータを用いた解析(アレルギー症状誘発確率の推計)については、複数の数理統計の専門家の参画等、研究体制の拡充を検討することが望ましい。</p>